



日夜、ロボットの研究にいそしんでいた教授と助手は、完成間近のある日、途方に暮れていた。

ロボットは完成に近づき、性能も申し分ない。けれど最後の砦が、目の前に迫っていたのだ。それは、空気を読むという機能である。

ロボットは思ったことをそのまま言ってしまう。それは正しい事がほとんどである。しかし、その場の空気というものがある。言うてはいけないこともある。けれどそれはその場の雰囲気で、なんとなく人生経験の中から察知するものであり、生身の人間ですら、今の言動はふさわしかったのかどうかということ、日々心に問いかねながら生活している。それが、ロボットにできるはずもないのだ。

今日も、ロボット君は、来客の際にやらかしてしまった。

お客さんの顔に、ごはんつぶがついていたのだ。ロボット君は、顔認識機能によって、その米粒を察知し、瞬時にお客様にお知らせした。

「顔に米粒がついています」「取ってさしあげましょうか」

研究室にいた人々の70%がこの声に気づき、研究の手を休め、お客の方を振り向いた。

ごほんとかばらいをして、お客はそっと顔を手で拭い、米粒を顔からひっぺがした。

その場の気まずさといったらなかった。

おしえてあげたほうが親切ではある。しかし、教えるとしても、タイミングと適切な音量とがある。

ロボット君は「お茶をどうぞ」のタイミングと音量で、お客様に米粒のお知らせをしてしまった。

こんなことがしょっちゅうあるのであった。

「どうしたらいいだろう」

博士はもうこの問題に何週間も頭を悩ませていた。

「これはひとつひとつの事案に対して、ひとつひとつプログラミングしていくしかないんじゃないですか？」

「いや。問題は、ロボット君に感情がないということなのだ。顔に米粒がついていることを恥ずかしいと思わなければ、こっそりと教えるという動作に結びつかない。」

「けれどそれは、究極の問題ですよ。ロボットに本当の意味で感情が芽生え出したら、私たちとの区別ができなくなるんじゃないですか。」

博士は頭を抱えたままうーむとうなっていた。

「とりあえず、間違いや違和感をすぐに指摘しないようにプログラミングしてみてもいいかがでしょう」

「よし、わかった。そうしよう」

そして数か月後、遠慮がちなロボット君ができあがった。

博士は試しに顔に米粒をつけて、ロボット君の前に立ってみた。

ロボット君は何も言わなかった。

「よし、成功だ」助手が嬉しそうに言った。

「よくやった、ロボット君。」そう言いながら、ロボット君の頭をなでた瞬間、やかんを触ったかのように、「あちっ」と言って、助手はすぐさまロボット君から手を離れた。

「どうしたんでしょう、教授」

「ロボット君は、言いたくてたまらないんだ。けれども言えないから、自分の中でストレスをため、発熱してしまったんだ」

「かわいそうに」と言って、博士は一旦ロボット君の電源を落とした。

ふ～んと唸って、ロボット君は静かに冷めていった。

「やはり、このままじゃだめだ。何か、そうだな。弁のようなものをつけようじゃないか」

「弁のようなもの？」

「そうだ。思ったことをそのまま言うのでもなく、ただ押し込めるだけでもなく、言っても良い言葉に調整して、少しずつ出せるようにするのだ。」

「なるほど！！けれど博士、それはとても難しいことですよ」

「やってやれないことはない。わしら、天才コンビなんじゃから」

「そうですね」

二人はウキウキしながら、開発を進めた。

二年後

遂に、発言に弁をつけた新生ロボット君が誕生した。

そのロボット君の前に、米粒をほほに付けた博士が立ちはだかった。

「さあ、どうじゃ、ロボット君」

しばらく無言を貫いたロボット君は、ぽつりと言った。

「食べれるって素敵ですよ～。ま、僕は固形物が食べられないんですけどね。憧れますよ～おにぎりとか。ぼくはおかゆすら食べられないし。」

「すばらしい！！」と博士は叫んだ。

「でも、ちょっと嫌味っぽくなってませんか？」と、助手が指摘した。

【2019-05-16】指さし小説

<http://p.booklog.jp/book/127010>

今回のテーマは、弁でした。最新のロボットは、感情を持つのでしょうか。
わかりませんが、イメージできる機能がつけば、そのうち感情も芽生えるでしょう。

著者：柿本慧こ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/resipi77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/127010>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト